

うめきた2期区域 新産業創出機能について

前回地域部会(H28.4.13)の内容

- 中核機能の要素である「新産業創出」「知的人材育成」「国際集客・交流」について中核機能推進会議での検討内容を報告し、イノベーション拠点のテーマを「ライフデザイン・イノベーション」とすることを確認。
- まちびらきまでの期間を活用し、うめきた2期の認知度や関心を高めていくため、プロモーション事業や先行事業を企画・実施していくことを確認。

□今後について

- ✓ うめきたが関西の「ハブ」となるための仕組みづくりについて、引き続き関係者と具体的な連携構築に取り組む。
- ✓ 中核機能の核となる新産業創出機能の具体化や産学官の役割の明確化に向けて検討を継続する。

中核機能推進会議WG(H28.8.3)等での主な意見

(出所)2016年8月3日「第4回中核機能推進会議WG(うめきた2期区域における新産業創出機能の実現に向けての意見交換会)」より
主要な意見を要約。また、関係者への別途ヒアリングにおいて得られた意見も含めて掲載。

□イノベーションをとりまく状況

＜イノベーションをおこすには、早い段階からこれまでにない協業が必要＞

- 社会の変化、技術革新のスピードに対応していくには、単独の大学や一企業の取り組みだけではもはや困難になってきており、開発や事業化の方向性を決める段階から、今まで組んだことのない人々と協業していくことが必要になっている。
- 大学は、外に開かれた組織となる必要がある。大学や研究開発拠点間の連携により切磋琢磨することや、大学や企業が組織対組織で連携する仕組みも重要となってくる。

□うめきた2期のコンセプト

＜関西全体のイノベーションハブに＞

- 大阪だけではなく関西全体でイノベーションが生まれるための「ハブ」にすべき。
- 関西の研究開発拠点や大学等の人や技術が、ここでの活動を通じてイノベーションに繋がるようにすべき。
- うめきたを、既存のネットワークを超えた様々な業種の人々や研究者・技術者が集まって、新たな発想が生まれる場所にしたい。

＜関西の知を社会実装につなぐ場に＞

- うめきた2期では、様々な人を巻き込んだ実証事業ができると良い。

中核機能推進会議WG(H28.8.3)等での主な意見

□うめきた2期に求める機能

＜求心力をもつ人材の確保＞

- ・ スーパーコーディネーターを適切な処遇で獲得・配置することで、拠点の求心力を高めていくことが重要である。

＜関西の知とビジネスがつながる場＞

- ・ 国や地方機関、経済界等のイノベーション支援制度を横断的に把握して紹介できるワンストップサービスがあると良い。
- ・ イノベーションに取り組む企業等を、国や金融機関等による支援に有機的につなげる場所にすることが必要。
- ・ 研究から実用化までの各段階に応じて、必要となる人材と出会い、繋がる機会が必要。そのためには、企業側にも、社員が社外でチャレンジすることを支援する体制があることが望ましい。
- ・ 世界中のイノベーション拠点とどれだけ連携できるかが重要である。相互に連携・補完することで、実用化やビジネスの海外展開が加速される。
- ・ ベンチャーは、実験や製造にあたり規制をクリアした設備・施設を持っていないため、スケールアップ等実験ができる施設情報を提供できると良い。

＜実践の場でのイノベーション人材の育成＞

- ・ イノベーション活動が行われる場所で大学と企業が人材育成で連携すれば、リクルートや産学連携等のネットワーク形成にも繋がっていく。

中核機能推進会議WG(H28.8.3)等での主な意見

□まちびらきに先行して取り組むこと

＜産学官が必要性を共有できるものに＞

- ・ 企業側の視点に立って、うめきた2期で何ができるのかイメージが湧く取り組みができれば良い。各企業の担当者、技術者だけでなく、その上の経営者層が理解しやすいものにすべき。

＜楽しい取り組みを発信＞

- ・ イノベーション支援機関のイベントや支援プログラムを継続的に実施するとともに、産学の幅広い参加を促し、うめきた2期への期待や機運を醸成していくことが必要。
- ・ 地方創生のためにも、国のイノベーション支援機関等のうめきた2期への立地と、さらなる機能強化をお願いしたい。
- ・ 取り組みは、まちびらき後の取組内容に近い形で実施すべきである。例えば市民との接点を活かした「データ測定」と「楽しみ」の要素を見せるなど。
- ・ おもしろいことをして、うめきたの認知度を上げないといけない。
- ・ プロモーションは、サウス・バイ・サウスウエストのように、音楽祭や映画祭などとあわせてイノベーション関連イベントを開催し、相乗効果を狙うと効果的だろう。

＜時代の変化に対応できる組織を＞

- ・ 地域の競争力強化のためにも、速やかに先行的取り組みを進めていくこと。時代やトレンドの変化は速いので、まちびらきまでの試行の積み重ねによる仕組みの構築やノウハウの蓄積等が重要。

これからの「新産業創出」に求められるもの①

- ・ 高齢化の進展、労働力人口の減少を見据え、健やかな暮らしを支える技術やサービスに対する社会ニーズは今後ますます高まる。
- ・ また、国境を越えて人・モノ・カネ・情報が瞬く間に行きかう時代を迎え、新製品がコモディティ化するまでの時間が、どんどん短縮されている。

□オープンイノベーションによる事業化のスピードアップ

- ・ このような状況に対応するためには、例えば、企業等のトップの素早い決断のもと、オープンイノベーションによって常に新しいアイデアや発想を獲得し、足りないプロセスを外部調達するなど、事業化のスピードアップを実現することが必要となっている。
- ・ そのためには、これまでにない産学官民のネットワークによる「共創」を実現する場を、多くの人が集まる都心に設け、関西一円にある豊富な新技術から新産業を生み出す取り組みを加速する必要がある。

これからの「新産業創出」に求められるもの②

□高い研究開発力を活かしたイノベーション創出

- 我が国の成長や産業競争力の維持のためには、革新的な技術を核としたイノベーションが不可欠である。
- 大学・研究機関等の技術シーズの橋渡しを受けた企業が事業化を通じてグローバルに成長し、その収益が研究資金へ還元され、さらなる技術シーズの創出に繋がる好循環の仕組みづくりが重要。（「日本再興戦略2015」より）
- そのためには、技術シーズと事業化の間にある、いわゆる「魔の川」「死の谷」「ダーウィンの海」と呼ばれる難関を乗り越えて、新産業を創出するための産学官民の連携の仕組みや体制の構築がカギとなっている。

「魔の川」

- 研究ステージから開発ステージへ進むためには、技術シーズを社会ニーズに結びつけ、具体的なターゲットを見定めて開発プロジェクト化を行うことが必要となる

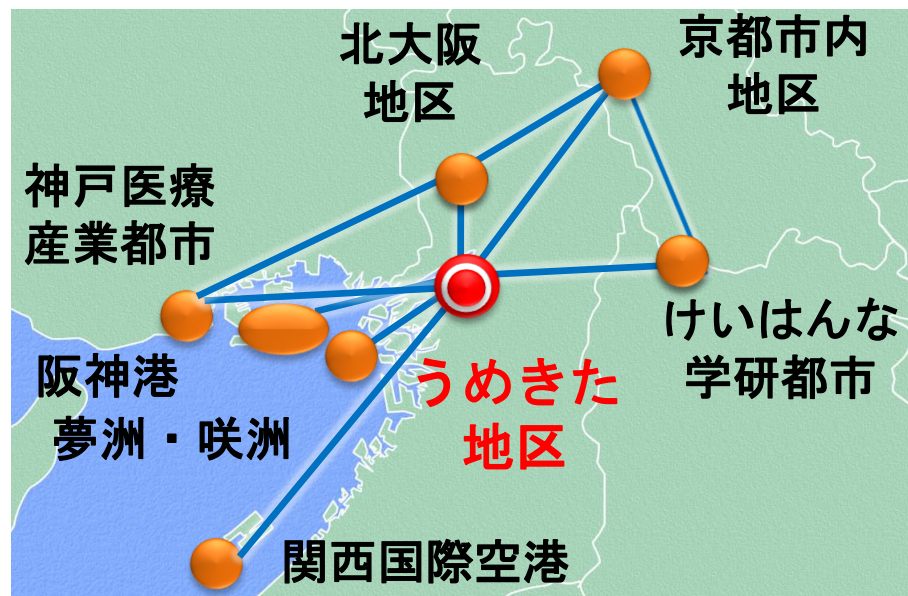
「死の谷」

- 開発・事業化の段階において、開発資金や人材、設備等の経営資源を確保することが必要となる

「ダーウィンの海」

- 市場に投入される新製品やサービスが、他のライバル企業との競争の中で生き残るための競争優位性の確立が必要となる

うめきた2期の新産業創出機能の役割



□うめきた1期の成果

起業家をはじめ多様な人材が集積し、ITやサービス分野などでビジネス創出に繋がっている

- ・ナレッジサロン会員数: 2000名超
- ・グランフロント来場者: 1億5千万人
(2016年3月時点)

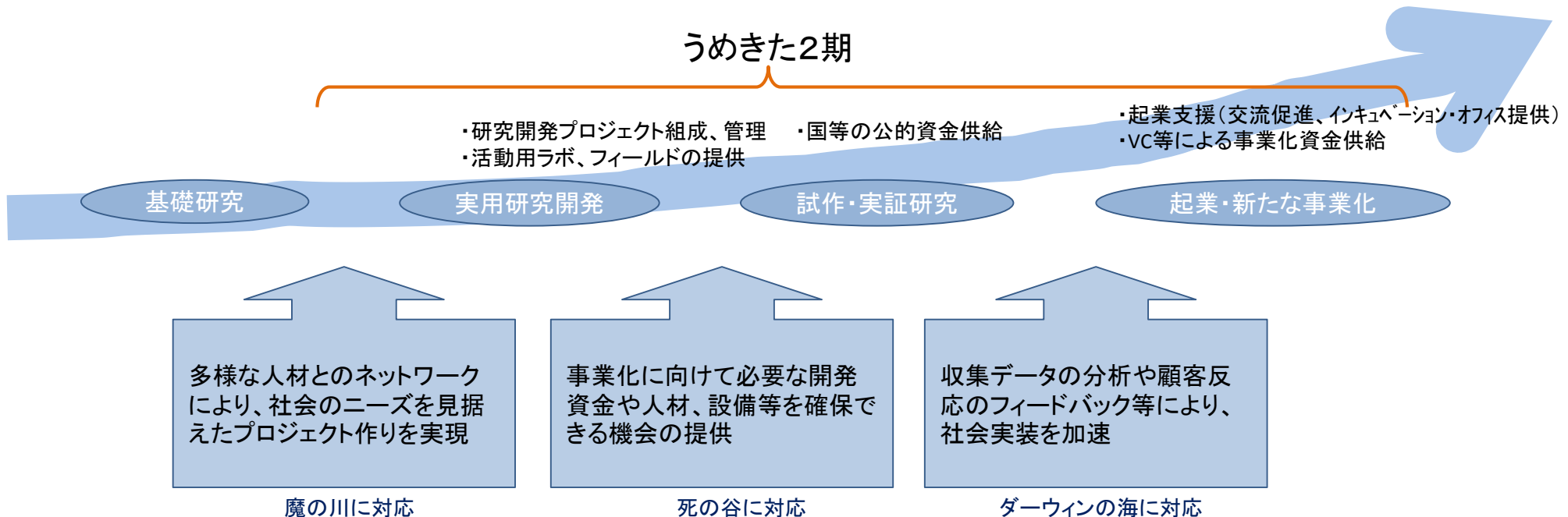
□関西の人と技術をつなぎ、事業化のスピードアップを実現

- ・ 関西の交通結節点にあり、人々が集まりやすいうめきたで、関西一円の優れた研究開発拠点(大学・研究機関や企業等)の新技术を多様な人々に「橋渡し」する仕組みを実現し、事業化をスピードアップする。
- ・ 人々が集まる都心の魅力的な「みどり」空間を活用し、技術の実用化や実証研究に産学官民が連携して取り組み、事業化をスピードアップする。

イノベーションプラットフォームの構築

□うめきた2期の新産業創出機能

- ・ 新しい技術から新しい製品やサービスをより早く生み出すため、技術と人が集まるプラットフォームを構築する
- ・ 多様かつグローバルな人材のネットワークを駆使し、新技術を基に事業化を図るプロジェクトチームを組成する
- ・ イノベーション創出を支援する機関等を集め、研究開発から実用化まで、各段階における切れ目のない支援の獲得機会を提供する



イノベーションプラットフォームが実現する機能

■関西の技術につながる、人につながる

- 関西の大学・研究機関から、新しい研究テーマ、研究成果が常に発信されており、研究者と企業の研究開発担当者、商品開発担当との接点を提供される
- 研究者は、常にビジネス創出を考えている人々に出会い、企業や起業家に技術の橋渡しができる
- 国のファンディングエージェンシー等、研究開発や事業開発への資金の出し手が集まり、資金獲得のチャンスが広がる
- 実践的な人材育成プログラムが提供され、イノベーション活動に挑戦する人材が集まる

■まちを訪れる消費者と、企業等が協業する

- 「みどり」の屋外空間で様々な未来技術やサービスを楽しみながら体験し、そこで得られる情報を自らに活用できる
- 「みどり」の屋外空間で展開される人々の様々な活動により、他に類を見ない研究、マーケティング、広報・展示の機会が作りだされる
- 実証事業をコーディネートするワンストップサービスがあり、利用できる

■国際的なアライアンスのチャンスが広がる

- 海外のイノベーション拠点とビジネスに繋がる実践的な往来を行うパイプがあり、利用できる
- 研究開発や事業開発の初期段階から 海外人材との協業を進めることができ、海外のニーズも見据えた開発や、海外マーケットへのアクセシビリティを高めることができる

うめきた2期の「みどり」と新産業創出

- ・ うめきた2期の都心の「みどり」の空間を通じて、来街者が参加・体験し、楽しみながら商品開発や評価に参画できる、世界で唯一のフィールドを実現
- ・ ここで繰り広げられる人々の活動は、個々人の協力を得て情報として活用され、新しい技術やサービスに繋がり、社会課題の解決に生かされていくことが期待される。

例)

- ・ 「みどり」の屋外空間でウォーキングし、バイタルデータや各種センシングデータから得られる運動度・健康度などを通じて、効果的な健康づくりに活用
- ・ スポーツ選手の動きやボールの動線をリアルタイムに可視化し、「勝てる戦略」を検討
- ・ 未発表商品や試作品の体験、感想・評価のデータ提供などを通じて、学術研究や製品開発へ貢献

- ・ また、「みどり」と境界なく繋がった会議室や、多様な人材と共創することを可能とする柔軟でクリエイティブな未来のオフィス環境などが実現されることが期待される。

「みどり」を活用したイノベーション創出（イメージ）

□開発中の新技術を持ち寄り、新製品・サービスを創出するための実証を行う場を創出



- 「みどり」のフィールドで行う様々な活動やモニタリング・データ収集等に必要となる設備として、通信基盤、電源、給排水設備等をあらかじめ整備
- 実証を行うための前線基地となる空間を、「みどり」の中の建物内などに確保